

“継承の困難”と MLA 連携

ーその両者を繋げて学部学生の調査研究力の底上げを狙うことの試み¹⁾

跡見学園女子大学教授 水谷 長志

元東京国立近代美術館情報資料室長

1. はじめにー21 世紀生まれの新入生を迎えた大学で

新型コロナに見舞われた今年の春の大学ですが、令和 2 年度の新入生は 2001 年、21 世紀の生まれであることをあらためて思う日が続いています。その彼・彼女らが待ちに待った新生活、新しいキャンパスライフは、本日のシンポジウム同様、リモートでの講義が、わずかに新入生と大学とを結ぶ唯一のか細い糸になろうとしているようで、将来のままならない困難を予感せざるを得ません。

この事態の中で本日開かれる情報メディア学会のシンポジウムが「アーカイブの課題と現状」をテーマに開催されることの意味の深さと大きさは、Zoom を用いたとしても遠隔の、現実に対面することは叶わない講義を重ねるとき、一層に切実なものがあるように感じられます。

2. “継承の困難”を図書館学概論の導入で語ること

今年の新入生が対峙したコロナの困難ではありますが、その彼・彼女らの生まれた 21 世紀の幕開け、21 世紀の始源となるイメージ・アイコンこそは、9.11 の NY のワールド・トレーディングセンターへ飛び込む二機の旅客機とツインタワーの崩落と火災でした。そして昨年、初春にはあのノートルダム・ド・パリが、晩秋には那覇の首里城の焼け落ちる姿が、何よりも小学校の高学年になろうとしていた新入生もまた記憶に残す 2011 年 3.11 の東日本大震災へと遡り、さらに時空を越えてアレキサンドリアの図書館にまで及ぶとき、MLA のいずれもが避けては通れなかった“継承の困難”さこそ、図書館学の導入において語られるべき重要事はほかにはないように思われて仕方のない 2020 年度の幕開けでした。

3. MLA 連携の発想から今日の共通課題へ至ること

本稿を用意する最中に届いた最新号の『図書館雑誌』は、「図書館とオリンピック」を特集していました²⁾。特集の冒頭 2 篇は国立公文書館、秩父宮記念スポーツ博物館と日本オリンピック委員会に勤務される著者によるものですが、どちらの論考のタイトルにも「MLA 連携」の語が登場しているのです。これなどをもってしても、MLA 連携が M-L-A のいずれの世界においても共通のテーマと課題として内在化されてきたことが確信されます。

筆者は長く近代美術館の中のアートライブラリ（アートアーカイブを含む）に勤務いたしましたので、職場そのものが MLA のトライアングルの渦中にありましてし、勃興する連携構造の顕示の場に常時身を置いていたのではありますが、この『図書館雑誌』からあらためて MLA 連携を見直す好機をいただいた気がしております。

4. 大学での司書/学芸員課程の講義において MLA 連携を語ること

MLA のいずれにおいてもその現場に身を置くプロフェッションには、その職責と倫理の基底に目の前にある収集・集積物の“継承”とその“困難”があることを繰り返し身に沁みている

はずです。MLA のプロフェッションとしての司書・学芸員そしてアーキビストの教育においてもその“困難”の歴史と超克こそ伝えられるべき最重要事として現在の本務校あるいは複数の出講大学において、博物館情報メディア論として、あるいはアーカイブズ学の選択科目として講じ、いずれにおいても、学期最終のレポートに「MLA 連携の事例を探す」を課してきました。その模様をぜひこの機会に紹介させていただきたく、スライドを用意いたします。

5. 学部学生の調査研究力の向上へ力を発揮する M [S] LA 連携

学部学生が生涯で初めてまとまった論考を著述するのは、多くの場合、卒論でしょう。上記の通り、学期の最終のレポートである「MLA 連携の事例を探す」は、M の「作品・資料」と L の「図書・文献」の二項関係を越えて、第三極に A を置くことのトライアルとなっています。

この課題において受講学生が抱く難儀さの多くは、A への体験の不在とアクセス困難さに由来するのですが、最終的には三者連携の事例を発見して、L-A の二項関係からのみでは到達できない新知見 [あるいはそこへ至る可能性] への期待を体験しています。

本学の学祖跡見花蹊についても、学内の記念資料館 [M] および大部の日記 [A]、そして関連文献資料群 [L] へのアプローチによって、1 単位の選択科目の図書館基礎特論においても同課題の達成に成果を見せる学生が現れます。

このような M を拡張して、S [探索対象主題 (Subject)] と L の二項関係から、さらに A の発見 (いまこれが一番学生にとっては困難なのですが) により構築される SLA の連携が学部学生の調査研究力の向上へ力を発揮することを予感しているのです。

6. おわりにー「館」の学からデジタルアーカイブ (学) を照射することを

筆者は二期生としてかつての図書館情報大学を卒業したのですが、卒業間近の頃、面白く興味深いご意見を、議論百出の感のあった「図書館情報学」に向けて差し出された先生がいらっしゃいました。

それは「情報学は雄カマキリである (Information Science and Male Mantis)」³⁾と題する小文なのですが、記憶に残るのは末文の「私の見るところ、図書館学は、彼女は、いま空腹のようだ」の一文であり、その前言においては、「図書館情報学は、図書館学と情報学が仲むつまじく手を取り合った姿として考えることは私には出来ない。情報学は図書館学に喰われねばならない。情報学がかっこ良くポーズをきめているうちは本物でなく、図書館学に喰われて姿を消さなければいけない、カマキリの雄が雌に喰われるように」と述べられていたのです。

この情報学をデジタルアーカイブ (学) に、図書館情報学を MLA の「館」の学に差し替えるならば、雌雄のカマキリの構図がいまも生き生きと蘇るような、そんな景色がわたしの眼前に描かれるのです。

1) 本稿およびシンポジウム当日のプレゼンテーションは筆者の既出の、特に下記文献を踏襲している。

「極私的 MLA 連携論変遷史試稿」『美術フォーラム 21』35 号, 2017, p. 127-134.

「MLA 連携 [論] は学部学生の新たな調査研究メソッドになるだろうか?ーミュージアムの中のライブラリ & アーカイブで構想した〈MLA 連携〉から大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈SLA 連携〉へ」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』Vol. 18, 2020, p.139-124.

2) 『図書館雑誌』vol. 114, No. 5, 2020. 5. 2 篇の標題は「オリンピック・スポーツ資料での MLA 連携の可能性ー秩父宮記念スポーツ博物館と国立公文書館」、「持続的なオリンピック・ムーブメントに向けた取り組みーオリンピック資料を通した MLA 連携」。

3) 徳山五郎『図情大館報』3 巻 4 号, 1985, p.6-7.

水谷 長志（みずたに たけし）

現職：跡見学園女子大学文学部人文学科教授（司書資格課程担当）

略歴：金沢大学および図書館情報大学卒業。東京国立近代美術館企画課情報資料室長、独立行政法人国立美術館本部事務局情報企画室長などを経て、2018年4月から現職。専門は図書館情報学、アート・ドキュメンテーション。主な著作に『図書館文化史』（勉誠出版, 1982）、共編著書に『MLA連携の現状、課題、将来』（勉誠出版, 2010）、『公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 I-III」報告書』（JAL プロジェクト, 2015-17）他。図書館サポートフォーラム賞受賞（2007）、独立行政法人国立美術館長キュレーター・オブ・ザ・イヤー受賞（2015）、アート・ドキュメンテーション学会野上紘子記念アート・ドキュメンテーション推進賞受賞（2017）。